

穴の向うの世界

立川 多恵子

少し前になるが、私は上野の都美術館に手作り絵本の
展覧会を見に行った。母親たちの力作にまじって園児の
作品と思われるものが展示されていた。その絵本の題は
『ずっこけどっすん』。地震のような大きなショックに驚
いたきつねが穴に入って、いろいろな動物と出会う話で
あるが、動物の表情のゆたかき、くりひろげられる話の
面白さが私を魅了した。勿論大人が手伝ってまとめられ
たものであるが、とにかく楽しい絵本だった。このよう
な絵本を生み出す子どもたちが生活している園は、どん
な園だろうか、是非一度訪ねてみたいと思った。

しかし仕事に追われる毎日で、じっさい園を訪ねたの
は、二か月もたっていた。

崖下にある園舎は町の公民館を一時的に借りたもので
あり、二十一畳のたゞみの部屋と六坪の板の間しかない、
近代的な施設・設備のある園とはおよそおもむきを異に
するものだった。

丁度お天気がよかったので、子どもたちはみんな庭に
出て、それぞれ好きなあそびに夢中で、私のような訪問
者に積極的な関心を示す子もいなかった。

女の子は、庭先にこぼれ落ちた花びらを拾って水につ
け、一人は小枝でかきまわし、他の一人は小石でかきま
わしていた。お花で色水を作っているようにも思えた。

砂場では男の子が、異年令の子ども四、五人と山を作
ったり、池を掘ったりしていた。

子どもたちは器をもって、遠い水道から水をはこんで
何往復もしていた。

梅林をくぐって園舎の反対側に出ると、三才前後の子
どもがつみ草をしていた。私は子どもたちにカメラを向

けた。するとかたわらで自動車にのってあそんでいた子どもが、後を押していた子どもを誘ってカメラの前にやってくる。四人とも大変真面目な顔でレンズの前に立つ。

庭にはブランコが二つ、そのうちの一つは、四人の箱ブランコであるが、数人の子どもが、それにのってバスごっこをしている。

聞き馴れぬ駅名も聞かれる、駅に着くたび、子どもたちの間で、小ぜり合いが起る。降りる子どもがいないのだ。

昼近くなると、三才未満の子どもたちは、お迎えのお母さん、お祖母さんに連れられて帰っていく。

園長がボールを持って庭先に現われた。子どもたちに向ってボールとボールを蹴る。そういえばさっきの男の子が「サッカーやりたい」といった時、先生は「小さい子のいる時はだめ」といっていた。庭がせまいからだ、(三才未満児が降園したところで)、そこでいよいよサッカーの始まりである。

先生と子どもたちでゴールを描く。

A夫「今日は男と女でやるるか」

A子「いゝヨ、いゝヨ」

それぞれの子どもが仲間を集める。B夫は朝から園内にある器という器に砂をつめていた。そのB夫に向って、

A夫「サッカーやるから仲間に入れ」

B夫「ほくやらないヨ」きっぱりいう。

二人はしばらくにらみ合っている。B夫は三日前に遠くの保育園から転園してきた子どもである。昨日について園にあるだけの器に砂をつめ、長いシーソーの上に乗っていた。

器に砂をつめる活動をすることで安定し、園中の器を砂で征服することによって、転園時の不安から脱しようとしているかに思われた。

サッカーといっても、それは単なるボールのけり合いであるが、子どもたちは一生懸命だった。十二時過ぎると、予め約束でもしていたのか、保母さんの「お昼にし

「ようか」の一ことで、手を洗い、お弁当の包みを持って園長保母と一緒に子どもたちは、二列に並んで、近くの廃駅めざして歩き出す。

私たちも後からついていった。目的地につくと、男の子はレールとレールの間にお弁当をひろげた。女の子と年少の男の子は、枯草の上に陣取った。

園児数 二十一名（男十名、女十一名）大人は、園長と保母（一名）助手（一名）の三名である。

子どもたちのお弁当は都会の子どもに負けないほどカラフルであった。卵やき、ソーセージ、キュウリ、私は園環境からみて、味噌のおにぎりを持ってくる子もいるのではないかと期待したが、その点では期待はずれだった。

食事は速度の早い子は十分位、B夫も十五分位で食べ終わった。男の子の中には四〇分もかけて食べる子もいた。お弁当を食べ終わった子どもから、それぞれのあそびに入る。

女の子はすゝき採りを始める。大人でも千切れないす

ゝきを上手に手折っていく。どうやって折っているのか近づいてみると、さびた針金を拾って、それでひっぱって折っている。子どもなりの生活の知恵である。そのうち二人の女の子は廃線になっている線路にまたがって、すゝきの穂を一本一本石でこすり始める。

立川「何ができるの」

B子「あのね、わ、た、お人形作るの」

子どもは黙々と仕事をつづける。他の子はすゝきを手がると、二人の子どものところへはこぶ。一時間余りで、すゝきの綿は山になった。すゝきの穂を押える指先がしなる。小石をもつ指に力が入る。根気のよさに驚く。私も幼い日こんなあそびに時間の経過することを忘れていたのを思い出す。

男の子は「しの」で剣を作る。一本、二本、三本……どの子も四、五本の剣を腰にさしはさむ。この活動には転園してきたB夫も参加していた。

そのうち一人が斜面をころころがり出す。つゞいてまた一人、先生が「剣をおいてね」と声をかける。子

どもたちは剣を友だちにあずけてころがる。中には相変らず剣をつけたまゝころがっている子もいる。

どの子の洋服にも枯草がついて、枯草模様になる。弁当と一緒に食べたC夫に促されて、B夫が初めてころがった。なかなか上手である。今のところ、何ごとにも用心深いB夫であるが、やがてこの園の子どもたちにとって、よい刺戟になってくれるにちがいない。

食後野原で心ゆくまであそんだ子どもたちは、先生の「帰ろうか」の声に、それぞれ遠くであそんでいる友だちを誘いに行く。園に戻った子どもたちは、おやつを食べると一堂に集って、先生に絵本を読んでもらう。この時は三才のE夫も、四才のC夫も首をのびして絵本をみつめる。先生は小声で静かに、静かに読みつづける。庭先ではお迎えの親たちが待っている。

子どもたちの親は、近くのセメント会社の社員が多いという。中には画家、大学の先生もいる。

私は小さな小さな園で、子どもたちと秋の日の一日を楽しく過ごすことができた。子どもたちの表情は明るかつ

た。園の子どもたちには、自由な時間、空間が十分保証されていた。先生と子ども、子どもと子どもをつなぐものは「豊かな自然」であり、「人のこころ」である。保育の原点に立ち戻った思いがした。

翌日学校で、私はこの日の経験を皆に語った。K先生が「まるで家なき幼稚園だね」という、そういうえば大正末期関西を中心に実践された橋詰良一の「家なき幼稚園」に似ている。

子ども同志の世界を尊重する、子ども同志の世界をつくる最適な場に大自然がある。広い野原、丘の上、川のほとりに子どもを集めて保育する、園舎というわくにとられないという点でよく似ている。

大正末期と現代は、教育に関して類似点が多い。私たちは現代の家なき幼稚園からいろいろ学ぶことが多いように思われた。慈父のような園長、母性的な保母、異年齢の子どもと一緒に、大自然の中に融けこんで生活を共にする、現代のもっともぜいたくということが出来る。

(十文字学園女子短期大学)